9.5［水］	非破壊検査 Presents　第21回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No. 21, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd Wednesday, 5th September, 19:00 / Festival Hall
9.6［木］	名曲シリーズ 福岡公演 福岡シンフォニーホール／19時開演 Popular Series in Fukuoka Thursday, 6th September, 19:00 / Fukuoka Symphony Hall

指揮／ジョセフ・バスティアン Conductor　JOSEPH BASTIAN ····· P. 6

ヴァイオリン／神尾真由子 Violin　MAYUKO KAMIO ····· P. 8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster　KOTA NAGAHARA

ベルリオーズ **序曲〈ローマの謝肉祭〉** 作品9［約8分］ ····· P.10
BERLIOZ / Le carnaval romain, op. 9

チャイコフスキー **ヴァイオリン協奏曲** ニ長調 作品35［約33分］ ····· P.11
TCHAIKOVSKY / Violin Concerto in D major, op. 35

Ⅰ. Allegro moderato – Moderato assai
Ⅱ. Canzonetta : Andante
Ⅲ. Finale : Allegro vivacissimo

［休憩　Intermission］

ドビュッシー **交響詩〈海〉**［約23分］ ····· P.12
DEBUSSY / La mer

Ⅰ. 海の夜明けから真昼まで
Ⅱ. 波の戯れ
Ⅲ. 風と海との対話

ラヴェル **ボレロ**［約13分］ ····· P.13
RAVEL / Boléro

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、FBS福岡放送（9/6）、読売日本交響楽団
［共催］（公財）アクロス福岡（9/6）
［特別協賛］非破壊検査株式会社（9/5）
［後援］福岡市・福岡市教育委員会（9/6）
［協力］コジマ・コンサートマネジメント（9/5）、福岡北東・福岡西南・筑後各読売会（9/6）
［マネジメント］キョードー（9/5）、エムアンドエム（9/6）

9.15［土］	第210回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 210 Saturday, 15th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
9.16［日］	第210回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 210 Sunday, 16th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor　SYLVAIN CAMBRELING ····· P. 7

チェロ／アンドレイ・イオニーツァ Cello　ANDREI IONIȚĂ ····· P. 8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster　TAKUMI KOMORIYA

チャイコフスキー **幻想序曲〈テンペスト〉** 作品18［約18分］ ····· P.14
TCHAIKOVSKY / Fantasy-Overture “The Tempest”, op. 18

チャイコフスキー **ロココ風の主題による変奏曲** イ長調 作品33［約18分］ ····· P.15
TCHAIKOVSKY / Variations on a Rococo Theme in A major, op. 33

［休憩　Intermission］

チャイコフスキー **交響曲 第4番** ヘ短調 作品36［約44分］ ····· P.16
TCHAIKOVSKY / Symphony No. 4 in F minor, op. 36

Ⅰ. Andante sostenuto – Moderato con anima
Ⅱ. Andantino in modo di canzona
Ⅲ. Scherzo : Pizzicato ostinato. Allegro
Ⅳ. Finale : Allegro con fuoco

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［共催］東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
文化庁

9.21［金］	第615回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 615 Friday, 21st September, 19:00 / Suntory Hall
9.23［日・祝］	第106回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 106 Sunday, 23rd September, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING ····· P. 7

ピアノ／ピョートル・アンデルシェフスキ Piano PIOTR ANDERSZEWSKI ····· P. 9

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

モーツァルト **歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲**［約6分］ ····· P.17
MOZART / “Die Entführung aus dem Serail” Overture

モーツァルト **ピアノ協奏曲 第24番** ハ短調 K.491［約31分］ ····· P.18
MOZART / Piano Concerto No. 24 in C minor, K. 491
Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Larghetto
Ⅲ. Allegretto

［休憩　Intermission］

ブルックナー **交響曲 第4番〈ロマンティック〉** 変ホ長調 WAB.104
（1888年稿／2004年刊コーストヴェット校訂版）［約70分］ ····· P.19
BRUCKNER / Symphony No. 4 in E flat major, WAB. 104 “Romantic”
（1888 version / B. Korstvedt edition 2004）
Ⅰ. Ruhig bewegt（nur nicht schnell）
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Scherzo : Bewegt – Trio : Gemächlich
Ⅳ. Finale : Mäßig bewegt

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
［協力］横浜みなとみらいホール（9/23）

文化庁

※9月21日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

9.28［金］	第581回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 Subscription Concert, No. 581 Friday, 28th September, 19:00 / Suntory Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING ····· P. 7

ヴァイオリン／諏訪内晶子 Violin AKIKO SUWANAI ····· P. 9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ペンデレツキ **広島の犠牲者に捧げる哀歌**［約9分］ ····· P.21
PENDERECKI / Threnody to the Victims of Hiroshima

シマノフスキ **ヴァイオリン協奏曲 第1番** 作品35［約26分］ ····· P.22
SZYMANOWSKI / Violin Concerto No. 1, op. 35
Ⅰ. Vivace assai – Ⅱ. Andantino – Ⅲ. Vivace

［休憩　Intermission］

ハース **静物**［約26分］ ····· P.23
G. F. HAAS / Natures Mortes

ラヴェル **ラ・ヴァルス**［約12分］ ····· P.24
RAVEL / La valse

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
［協力］**アフラック**

文化庁

ジョセフ・バスティアン

Joseph Bastian

欧州で話題の新鋭 注目の日本デビュー

©Astrid Ackermann

バイエルン放送響のトロンボーン奏者から指揮者に転向し、急速にキャリアを伸ばしている注目株が、読響を指揮して日本デビューを果たす。ドビュッシー、ラヴェルら色彩感豊かな作品でどんな手腕を披露してくれるだろうか。神尾真由子とのチャイコフスキーにも注目したい。

1981年フランス生まれ。ザールブリュッケン音楽大学でトロンボーンを学び、トロンボーン奏者としてマーラー・ユーゲント管などで演奏。2004年から17年までバイエルン放送響のバス・トロンボーン奏者として活躍した。16年2月、指揮者ティチアーティの急なキャンセルに伴ってバイエルン放送響を振り、センセーショナルなデビューを飾った。ハイティンク、ジンマンらのマスタークラスで学ぶ一方、ヤンソンス、ハーディング、ユロフスキらのアシスタントを務めて頭角を現し、16年8月にN.ヤルヴィ賞を受賞、翌年4月にはグシュタード祝祭管と独ツアーで成功を収めた。

これまでにザールブリュッケン＝カイザースラウテルン・ドイツ放送フィル、ニュルンベルク響、バーゼル響、ミュンヘン室内管、ブレーメン・フィル、ルクセンブルク・フィル、ベルン響などを指揮。2019年にはバンベルク響、フランクフルト放送響などへのデビューが決まっている。

◇9月5日 大阪定期演奏会
◇9月6日 名曲シリーズ 福岡公演

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

マエストロの真骨頂 変幻自在のタクト

読響常任指揮者としてのラストシーズンに挑んでいる我らがマエストロ。最終盤に向けて、その勢いは増すばかりだ。ブルックナー、チャイコフスキーらの名曲に新たな光を当て、得意の近現代音楽で真骨頂を発揮する。その変幻自在のタクトから一瞬たりとも目が離せない。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を歴任し、現在はクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を務めている。今年秋からはハンブルク交響楽団の首席指揮者に就任するほか、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘(しょうへい)教授も務めている。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

昨年11月に読響と披露した歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉(演奏会形式)は、『音楽の友』誌の「コンサート・ベストテン2017」で第1位に選出されるなど絶賛された。

◇9月15日 土曜マチネーシリーズ
◇9月16日 日曜マチネーシリーズ
◇9月21日 名曲シリーズ
◇9月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇9月28日 定期演奏会

©Shion Isaka

ヴァイオリン 神尾真由子
Violin Mayuko Kamio

2007年チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた実力派。これまでにロストロポーヴィチ、アルブレヒト、メータ、ロト、インバル、I.フィッシャーらの指揮で、ミュンヘン・フィル、南西ドイツ放送響、チューリヒ・トーンハレ管、バイエルン国立歌劇場管、BBC響など一流楽団と共演している。ニューヨーク、ミラノなど世界各地でリサイタルも多数。宗次コレクションよりストラディヴァリウス1731年製「ルビノフ」を貸与されている。13歳で読響にデビューして以来、共演を重ねている。

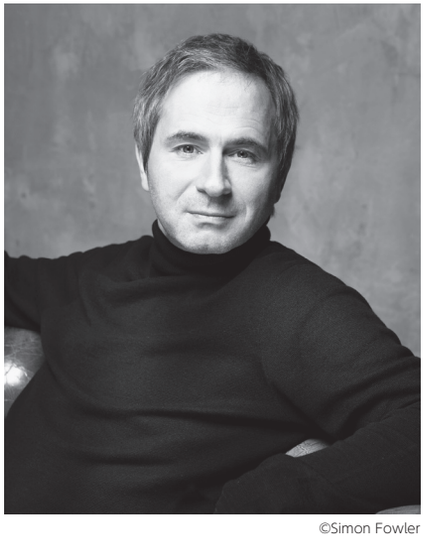
◇9月5日 大阪定期演奏会
◇9月6日 名曲シリーズ 福岡公演

©Peter C. Theis

チェロ アンドレイ・イオニーツァ
Cello Andrei Ioniță

2015年チャイコフスキー国際コンクールで優勝した新星チェリスト。タイムズ紙で「10年に一人の逸材、最もエキサイティングなチェリストの一人」と絶賛され、欧州各地で活躍している。1994年ルーマニア生まれ。ハチャトゥリアン国際コンクール優勝、ミュンヘン国際コンクール第2位など多数の受賞歴を誇る。これまでにカンブルラン、ゲルギエフ、プレトニョフらの指揮で、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、マリインスキー歌劇場管などと共演したほか、ザルツブルク音楽祭やヴェルビエ音楽祭にも出演。

◇9月15日 土曜マチネーシリーズ
◇9月16日 日曜マチネーシリーズ



©Simon Fowler

ピアノ ピョートル・アンデルシェフスキ
Piano Piotr Anderszewski

独特の世界観を持ち、深い音楽性を追求し続けている鬼才。ポーランド生まれ。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、ロンドン響など世界一流の楽団と共演を重ね、今年8月にはエディンバラ音楽祭やマントン音楽祭に出演した。録音ではワーナー・クラシックス／エラートと専属契約を結び、グラモフォン賞など権威ある賞を多数受賞。ヨーロッパ室内管を弾き振りした最新盤「モーツァルト：ピアノ協奏曲第25、27番」は『レコード芸術』誌の特選盤となった。読響初登場。

◇9月21日 名曲シリーズ
◇9月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

©Kiyotaka Saito

ヴァイオリン 諏訪内晶子
Violin Akiko Suwanai

世界各地で活躍する国際派。1990年に史上最年少でチャイコフスキー国際コンクールに優勝。これまでにサヴァリッシュ、スクロヴァチェフスキ、小澤征爾らの指揮で、ベルリン・フィル、パリ管、ロンドン響、ニューヨーク・フィルなどと共演。幅広いレパートリーを持ち、近現代作品の演奏にも定評がある。ルツェルン音楽祭やベルリン芸術週間などにも多数出演、自ら企画した「国際音楽祭NIPPON」の芸術監督も務める。使用楽器は日本音楽財団より貸与された1714年製のストラディヴァリウス「ドルフィン」。

◇9月28日 定期演奏会

9.5［水］ 9.6［木］

飯尾洋一（いいお よういち）・音楽ライター

ベルリオーズ

序曲〈ローマの謝肉祭〉 作品9

作曲：1843～44年／初演：1844年2月3日、パリ／演奏時間：約8分

「ローマは私の知るなかで、もっともばかばかしく、うんざりする街である。頭や心を持つ人のいるべきところではない」

エクトル・ベルリオーズ（1803～69）にとって、現実のローマは決して魅力的な街ではなかった。ベルリオーズを魅了したのは、ルネサンス期イタリアの彫金師ベンヴェヌート・チェッリーニ。チェッリーニの自叙伝を読んで感激したベルリオーズは、彼を題材にオペラを作ろうと考えた。こうして作られたのが、16世紀ローマでの謝肉祭を舞台とした歌劇〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉である。このオペラは1838年にパリ・オペラ座で初演されたものの、散々な失敗に終わったため、作曲者は「拷問台にかけられた」ような苦しみを味わうことになる。パリ・オペラ座は二度とベルリオーズに門戸を開こうとはしなかったが、一方、ベルリオーズにとってこのオペラは「おそらく二度と見出しえないような多様な楽想とエネルギー、豊かさ、輝かしい色彩を含んでいる」とまで述べる自信作だった。

そこで、ベルリオーズは〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉で用いた素材を転用して、序曲〈ローマの謝肉祭〉を書き上げた。作曲者自身の指揮によりパリで行われた初演は、アンコールを求められるほどの大成功を収めた。

謝肉祭の興奮を伝えるかのように勢いよく開始され、夢想的な愛の主題が続く。冒頭の主題が帰り、陽気で熱気にあふれた楽想が展開される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（タンブリン、シンバル、トライアングル）、弦五部

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

1878年、スイスのクラランで静養するピョートル・チャイコフスキー（1840～93）のもとを、友人のヴァイオリニスト、ヨシフ・コーテクが訪れた。彼が持参したラロの〈スペイン交響曲〉に触発されてか、チャイコフスキーは新たにヴァイオリン協奏曲の作曲にとりかかる。わずか12日間でスケッチを書き上げ、1か月足らずでスコアを完成させた。独奏パートの技法にはコーテクの助言を仰いだ。

作曲の筆は順調に進んだものの、初演は一筋縄ではいかない。ペテルブルク音楽院で教鞭（きょうべん）をとっていた大家レオポルト・アウアーから「演奏不可能な作品」として初演を拒否されてしまう。代わりに、作品を絶賛したモスクワ音楽院教授のアドルフ・ブロツキが初演を引き受け、1881年にウィーンでハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルと共演して初演を果たした。しかし、初演は聴衆の野次と批評家の酷評にさらされてしまう。著名な批評家ハンスリックは「悪趣味なものを作ることにかけては並の才能ではない」「終楽章に安酒の匂いを感じる」と辛辣（しんらつ）な評を寄せた。そこには、ロシア人が西欧的なスタイルの協奏曲を書いたことへの偏見が少なからずあったにちがいない。

後にブロツキが各地で繰り返し演奏したことで作品の評価は次第に高まり、アウアーも前言を翻（ひるがえ）して自身のレパートリーに加えることになった。現在ではメンデルスゾーンやブラームス、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲と並ぶ屈指の人気作となっている。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ ドラマティックな序奏に続いて、独奏ヴァイオリンが悠然と第1主題を奏でる。ひとしきり高潮した後、甘美で夢見るような第2主題があらわれる。

第2楽章 カンツォネッタ、アンダンテ カンツォネッタとは「小さな歌」の意。管楽器のみによる賛美歌風の序奏に続き、独奏ヴァイオリンが切々とした主題を奏でる。切れ目なく第3楽章に続く。

第3楽章 フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ 爆発的な総奏に、躍動感あふれる民俗舞曲風の主題が続き、熱狂的なクライマックスを築きあげる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドビュッシー

交響詩〈海〉

作曲：1903～05年／初演：1905年10月15日、パリ／演奏時間：約23分

もし音楽家にならなかったら、どんな職業に就いていたか。そう問われたクロード・ドビュッシー（1862～1918）は、「船乗り」と答えている。ドビュッシーが書いたオーケストラのための三つの交響的スケッチ〈海〉は、それまでの作曲家たちが描いてきた律動的な海とは異なる独創性あふれる作品となった。水面に光が輝き、風が吹き、波しぶきがあがる。時々刻々と移りゆく光と水と大気の様相が、精妙な音のドラマとして再現される。

1903年夏、ドビュッシーは妻の実家ビシャンに滞在し、〈海〉の作曲に着手する。当初、作曲は順調に進むように思えたが、ドビュッシーとエンマ・バルダックとの不倫、妻リリーのピストル自殺騒動といった私生活上のスキャンダルもあって、作品の完成は1905年3月まで遅れた。7月に楽譜が出版され、表紙には葛飾北斎の冨嶽三十六景「神奈川沖浪裏」がデザインされた。

10月、カミーユ・シュヴィヤール指揮コンセール・ラムルーによって初演が行われたが、批評家たちからは「海を感じない」「理解不可能」「とげとげしく不快な響き」といった酷評が寄せられた。後にこの作品が作曲者の代表作のひとつとして人気を博すことを予想した者はほとんどいない。作曲家の個人的なスキャンダルが作品評価に悪影響を及ぼしたのだろうか。

第1部“海の夜明けから真昼まで”
当初は“サンギネール諸島の美しい海”と題されていたが、特定の地名を含まないように改題された。暁を思わせる神秘的な導入から、一閃（いっせん）するようなトランペットとイングリッシュ・ホルンの主題が立ち上り、弦楽器の細かな動きが揺れるような海面を連想させる。太陽が昇り、大海原が光り輝く。

第2部“波の戯れ”　予測のつかない波の動きを模倣するかのように木管楽器群が絡み合い、高音のトリルを伴ったヴァイオリンの動機、ハープのグリッサンドなどが次々と加わり、絶えず生成される波の運動が描かれる。

第3部“風と海との対話”　風が吹き始め、海が呼応する。既出の動機を用いながら緊迫感を高め、やがて荒々しい嵐が到来する。最後は輝かしい全強奏で曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、銅鑼、シンバル、トライアングル、大太鼓）、ハープ2、弦五部

ラヴェル

ボレロ

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ／演奏時間：約13分

モーリス・ラヴェル（1875～1937）の曲の目立った特徴を三つ、挙げてみよう。スペイン趣味、舞踊、執拗（しつよう）な反復（たとえば〈夜のガスパール〉の“絞首台”のような）。その三つの要素すべてが一曲につめこまれているのが〈ボレロ〉だ。

ラヴェルはスペイン国境近くのバスク地方に生まれた。母親はバスク系である。生後すぐにパリに移ったラヴェルは、スペイン文化への愛着をたびたび作品を通して表明してきた。ボレロとはスペイン舞曲の一種。ロシア生まれの名ダンサー、イダ・ルビンシテインの委嘱によって作曲された。

曲は、基本パターンの反復と全曲を通した大きなクレッシェンドによって構成されている。冒頭で小太鼓がボレロのリズムを刻む。このリズムが延々と続く。そこに作曲者自身が「没個性的で、お決まりのスペイン＝アラブ風」と呼ぶエキゾティックな主題が登場する。この主題が次々と楽器を替えて奏でられる。まずはフルートで。次はクラリネットで、さらにファゴットで、エスクラリネットで、オーボエ・ダモーレで、フルートとトランペットの組み合わせで……。同じリズムと同じメロディがひたすら繰り返されるのだが、常にそこには音色の変化が伴っている。文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースは、この曲を「平らになったフーガ」と表現したが、おもしろい発想ではないだろうか。

珍しいトロンボーンのソロなど、腕利きの奏者たちのソロ自慢の様相を呈しながらも、複数の楽器が色とりどりの響きを作り出す。後半では弦楽合奏も加わって、次第に音の厚みを増してくる。クレッシェンドが壮麗な頂点を築いた後、突然、滝が流れ落ちるかのように曲が閉じられる。

ラヴェルは「オーケストラの扱いは簡素かつ明快で、名人芸を目指したところは微塵（みじん）もありません」と語っているのだが、これは逆説的な表現であって、どうしても名人芸と作曲者の巧みなオーケストレーションに耳を奪われずにはいられない。作曲者は作品の成功に懐疑的だったが、初演は大成功を収め、以来、世界中で演奏される人気曲となっている。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

チャイコフスキー

幻想序曲〈テンペスト〉 作品18

作曲：1873年／初演：1873年12月19日、モスクワ／演奏時間：約18分

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）が、シェイクスピアの戯曲をもとに作曲した三つの“幻想序曲”の第2弾。〈ロメオとジュリエット〉（1869）に次ぐ作品で、後に〈ハムレット〉（1888）が作曲された。

当時友好的な関係にあった「ロシア五人組」の理論的指導者スターソフの勧めで、1873年8〜10月に作曲され、同年の初演も好評を博した。また後のパトロン、フォン・メック夫人の支援は、本作に感銘を受けたのがきっかけだったという。若干長めだが、逆に叙情的な旋律美と色彩的な響きをたっぷり味わえる点が魅力。カンブルランに取材した際も、「本当に美しい作品。日本ではあまり演奏されないので、あえて取り上げることにした」と語っていた。

物語は、「弟と共謀者アロンゾーに権力の座を奪われたプロスペローは、魔法使いとなって、娘ミランダや精霊エアリエル、怪物キャリバンと共に絶海の孤島に暮らしていた。そこに宿敵が乗った船が通りかかる。プロスペローはエアリエルに嵐を起こさせ、難破した船を島に漂着させた。しかし、ミランダがアロンゾーの息子ファーディナンドと恋に落ちる。真実の愛を前にプロスペローの心も変化。全員を許し、魔法を捨てる」といったもの。

曲は、物語に基づくスターソフの構成案に沿って書かれている。ヘ短調の主和音に始まり、まずは弦楽器のざわめきと金管楽器によって海が描写される。やがてテンポを速めて激しい嵐の場面が展開。それが収まると愛の場面に移り、チェロが情感豊かに歌う。繊細なエアリエルと粗野なキャリバンの描写を経て、再び愛の場面となり、今度は熱く高揚。大団円を示す力強い音楽の後、静かな海の描写に戻って終結する。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部

チャイコフスキー

ロココ風の主題による変奏曲 イ長調 作品33

作曲：1876〜77年／初演：1877年11月30日、モスクワ／演奏時間：約18分

1876年12月から1877年1月にかけて作曲された、チャイコフスキーの“チェロ協奏曲”に相当する作品。単一楽章の変奏曲ながら、チェロの協奏作品の中でも最上位クラスの人気を得ている。書かれたのは、ピアノ協奏曲第1番（1875）、バレエ〈白鳥の湖〉（1876）と、交響曲第4番やヴァイオリン協奏曲（1878）の間という、生涯最初の充実期にあたる。モスクワ音楽院の教授（すなわちチャイコフスキーの同僚）だったドイツ出身のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために作曲され、1877年11月に初演された。「ロココ」とは、18世紀フランスのルイ15世の宮廷から始まった、バロックに続く美術様式で、ここでは宮廷的で優美な趣を意味している。

だがこの曲、初演前にフィッツェンハーゲンが独奏パートを変更した上、無断で第8変奏をカットし、変奏の順番も大幅に入れ替えた。しかもそのまま出版がなされ、なぜかチャイコフスキーも復元しなかったことから、フィッツェンハーゲンの改変版によって普及していった。なお、20世紀半ばにオリジナル譜が復元され、これが課題曲となっているチャイコフスキー国際コンクールでは、2002年の第12回から原典版の使用が規定されている。ただし本日は、一般に馴染み深いフィッツェンハーゲン版で演奏される。

曲は、主題と七つの変奏が、緩急の変化を伴った多彩な楽想とともに展開される、繊細で叙情的な音楽。ソリストには高度な技巧と高音域でのこまやかな表現が求められる。短い序奏（モデラート・クワジ・アンダンテ、イ長調）の後、チェロが優美な主題（モデラート・センプリーチェ）を呈示。第1、第2変奏では主題が細かく刻まれ、第3変奏（アンダンテ・ソステヌート）では美しい歌がたっぷりと奏される。ここは白眉ともいえる部分。民俗的な第4変奏（アンダンテ・グラツィオーソ）、フルートの旋律をチェロが装飾する第5変奏（アレグロ・モデラート）からカデンツァを経て、哀愁漂うニ短調の第6変奏（アンダンテ）へ。そして快活な第7変奏とコーダ（アレグロ・ヴィーヴォ）で華麗に締めくくられる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

作曲：1877～78年／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分

チャイコフスキー三大交響曲の第1弾。一括りに“後期三大”とも呼ばれるが、第5番の10年前（前曲〈ロココ～〉の直後）に書かれた、最初の充実期の作である。

チャイコフスキーは、1877年4月にモスクワ音楽院の教え子ミリューコヴァから求愛され、7月に結婚するも、すぐに破綻。モスクワ川に入水して自殺を企て、未遂に終わる。そして10月にロシアを脱出し、翌1878年4月まで、スイスやフランス、イタリアで静養した。また同時期には、鉄道王の未亡人フォン・メック夫人から年金が約束され、フリーランスへの道が開けた。

本作はこの激動のさなかの所産。1877年春頃に作曲が開始され、1878年1月にイタリアのサンレモで完成、同年2月にモスクワで初演され、成功を収めた。なお、楽譜の扉には「わが良き友に」と記されており、「友」はメック夫人を指すとみられている。

曲は、作曲者の管弦楽作品の中でもとりわけ情熱的でダイナミックな音楽。メック夫人への手紙の記述等から「自身の人生の苦悩を反映し、運命との闘いと勝利が描かれた作品」と解釈されている。前半2楽章が短調、後半2楽章が長調を基調とする“暗から明へ”の構成がなされ、冒頭で強奏されるファンファーレ風の「運命主題」が全曲の核となる。

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート～モデラート・コン・アニマ。「運命主題」が鳴り響く序奏の後、悩ましげな第1主題、甘く軽やかな第2主題を中心に、ドラマチックな展開を遂げる。

第2楽章　アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ。哀しげな主題が様々な楽器で奏され、中間部は舞曲調となる。

第3楽章　スケルツォ、ピッツィカート・オスティナート、アレグロ。「弦のピッツィカート」「木管合奏」「金管主体の行進曲」の3部分が交替し、最後は合体するユニークな楽章。

第4楽章　フィナーレ、アレグロ・コン・フオーコ。激烈な第1主題、ロシア民謡「野に立つ樺の木」に基づく第2主題、活発な第3主題が交互に登場しながら進む、迫力満点のフィナーレ。途中で「運命主題」が活気をさえぎるが、圧倒的な熱狂が戻って終結する。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、大太鼓）、弦五部

9.21［金］　9.23［日・祝］

江藤光紀（えとう みつのり）・音楽評論家

モーツァルト

歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲

作曲：1781～82年／初演：1782年7月16日、ウィーン・ブルク劇場／演奏時間：約6分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）が活躍した時代には、独墺圏でもオペラはイタリア語で上演されたが、歌の合間をせりふ芝居でつなぐジングシュピールというドイツ語の音楽劇も民衆の間で人気を集めていた。ジングシュピールを上演していたのも民間劇団だったが、啓蒙君主として知られるウィーンのヨーゼフⅡ世は自国文化の振興のために専門の宮廷劇団をブルク劇場に設置する。

1781年、成功を求めてザルツブルクからウィーンに移住したばかりのモーツァルトは、この劇場の公演監督であるゴットリープ・シュテファニーから、トルコの太守の後宮に捕らえられた恋人を救出するという筋書きのリブレットを受け取る。オスマン・トルコによるウィーン包囲から100年近くを経て、トルコ人の習慣や彼らがもたらした文物は人々の生活にエキゾチックな彩りを与えてくれるものとなっていた。モーツァルトの作品でも、トルコ行進曲付きのピアノ・ソナタK.331や〈トルコ風〉として知られるヴァイオリン協奏曲K.219が有名だが、トルコはウィーン人の異国趣味をくすぐる恰好の題材だったのである。華麗な技巧をちりばめ優れた歌手にも恵まれた〈後宮からの誘拐〉は大ヒット作となった。

序曲は急緩急の三部形式となっており、両端部分には大太鼓、シンバル、トライアングルが用いられている。これらは当時の標準的な管弦楽の編成にはなく、聴衆はその響きにトルコの軍楽隊をイメージしただろう。中間部のメロディーは、恋人を探すスペインの貴族ベルモンテが歌う最初のアリア“ここで君に会えるはずだ”だが、本編では長調で歌われるのに対し、ここでは短調で示される。

楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、大太鼓）、弦五部

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K.491

作曲：1786年／初演：1786年4月7日、ウィーン・ブルク劇場／演奏時間：約31分

モーツァルトが移り住んだ1781年当時、ウィーンは広大なハプスブルク帝国の中心地として、各地から裕福な貴族が集まっていた。モーツァルトは彼らを顧客に予約演奏会を開き、たちまち人気を博す。主要なピアノ協奏曲はもっぱらそのために作曲されたが、そこで彼は自身の技量を余すことなく発揮できたのである。1780年代中盤はモーツァルトが望んでいた成功を手に入れた、人生でもっとも幸福な時期であったと言えよう。

ブルク劇場での1786年の予約演奏会のために作曲された第24番は、まさにこの幸せな時代の終わりに書かれている。一連のピアノ協奏曲はどれも華麗な技巧を凝らしているが、この曲は同時に、木管楽器を十全に活用したシンフォニックな書法のもと内省的な感情を伝えている点で特別である。ピアノ協奏曲で短調の作品といえば、他にはこの前年に書かれた第20番の2作しかないが、両者に共通するパッションや重苦しさは古典派の表現を超えロマン派の萌芽（ほうが）を感じさせる。また、この曲のハ短調という調性も後年のベートーヴェンの傑作を予見させる。

第1楽章　アレグロ　ソナタ形式　不安定な音程の跳躍を含む第1主題が弦に提示され、オーケストラが反復する。ピアノ独奏が優美な第2主題を示し、木管楽器がこれを敷衍（ふえん）する。展開部はピアノが幅広い音域を駆け巡りながら、管弦楽と緊張感に満ちた対話を繰り広げる。

第2楽章　ラルゲット　ロンド形式　シンプルだが夢幻的な気分を浮かべたピアノの主題は、管弦楽ですぐに反復される。オーボエ、ファゴット、フルートなど木管楽器のアンサンブルがピアノ、弦との間に色調のバラエティーを作り出す。

第3楽章　アレグレット　主題と八つの変奏からなる。主題が管弦楽で色づけされながらひっそりと歌い出され、ピアノがテーマを反復したり管弦楽の装飾に回ったりと多彩に展開される。木管楽器群が新しい旋律を出して朗らかな気分を先導する第4、第6変奏などを挟みつつ8分の6拍子の最終変奏からコーダへ流れ込む。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ブルックナー

交響曲 第4番〈ロマンティック〉 変ホ長調 WAB.104

（1888年稿／2004年刊コーストヴェット校訂版）

作曲：1874年（第1稿）／初演：1881年2月20日、ウィーン／演奏時間：約70分

大器晩成型の作曲家アントン・ブルックナー（1824～96）が、リンツの大聖堂オルガニストの職を辞してウィーンに出てくるのは1868年、44歳の時のことである。当時ブルックナーはウィーン音楽院の教授として、またオルガニストとして知られていたが、作曲家として成功するという野心もたぎっていたことだろう。1870年代に入ると交響曲の創作に没頭。年に一作というペースで精力的に筆を進め、72年には第2番、73年には第3番、さらに74年の頭から取り掛かった第4番も11月には完成させている。

第4番はそれまでの5曲（番号のないものも含め）とは異なり長調で始まっており、個性的なスタイルが打ち出されただけでなく、自ら〈ロマンティック〉というタイトルをつけ、ある程度標題的な性格を持たせている（「夜明け」「シジュウカラのさえずり」「狩人たちの集い」といった描写的な内容を書簡などで知人に伝えている）。創作の転機の作であるだけでなく、初演も大成功をおさめ、作曲家ブルックナーの名声を広めるのに大きく与（あずか）った。

とはいえ、1881年に初演された〈ロマンティック〉は作曲当初の姿とはかなり異なっている。あくなき向上心に加え、演奏者の意見にも寄り添ったことから、ブルックナーの交響曲には様々な稿が存在するが、ここで〈ロマンティック〉の改訂の経緯を押さえておこう。ブルックナーは74年にひとたび曲を完成させた後、知人の音楽評論家を通じベルリンでの初演のチャンスをうかがうが、それがかなわなかったために78年に一回目の改訂を行った。さらに79年から80年にかけて終楽章をもう一度改訂し、これを改訂済みの第1～3楽章とともにひとまとまりとしたのが第2稿（1878／80年版）である。成功裏に終わった初演はこの稿に拠（よ）っていた。

その後、1888年にフェルディナント・レーヴェ、ヨーゼフ・シャルク、フランツ・シャルクが元となる稿を作り1889年に出版されたのが、初版とか第3稿と呼ばれるものだ。上演ごとにブルックナーが施した変更や改訂は他にもあるが、大きくみると〈ロマンティック〉にはこの三つの稿がある。スケルツォ楽章を入れ替えるなど第1稿と第2稿の違いは大きいが、それに比べると第3稿への変更は部分的なカットやオーケストレーションの改変に

とどまっている。

1936年に第2稿に基づくハース版が出版されるまで、初版／第3稿は〈ロマンティック〉の唯一の楽譜として約半世紀にわたり曲の普及に与った。当時は作曲者の意向は侵すべからざるものとは必ずしもみなされず、ブルックナーの交響曲も指揮者が自らの判断で改変したり、出版譜にも弟子の手が入っていたため、作曲家の意向を尊重した版が広まるにつれて初版は顧みられなくなっていった。とはいえ、ブルックナーが完全に納得していたかまでは定かでないものの、〈ロマンティック〉初版は本人のチェックを経ていることも事実である。この点を重く見て、初版を校正しなおしたのが2004年に刊行されたコーストヴェット版である。版・稿の性格・歴史性を押さえつつ演奏者の解釈に耳を傾けるのも、ブルックナーを聴く楽しみの一つなのである。

第1楽章　静かに動きをもって（速すぎずに）　弦の静かなトレモロの中からホルンの第1主題が聴こえ（いわゆるブルックナー開始）、さらに2＋3連符（ブルックナー・リズム）の流れるような上行旋律へ接続する。弦による優美な第2主題を挟んで、同じく2＋3連符で下行する第3主題が金管で強奏される。この三つのテーマを中心に進む。

第2楽章　アンダンテ　弱音器を付けた柔らかなリズムの上に、チェロが哀愁を秘めた主題を歌い出す。この主題はオーケストラ全体に広げられ複雑化されつつ繰り返される。その間に清涼なコラールやヴィオラの味わい深い旋律などが挟まれて奥行きを作る。

第3楽章　スケルツォ：動きをもって〜トリオ：ゆっくりと　ホルンが呼び交わして始まるこの楽章は狩りの描写だと作曲者自身が述べている。トリオはレントラーと呼ばれる舞曲の一種だが、狩りの合間の食事の際に演じられる踊りを表しているという。コーストヴェット版ではトリオの再現部が一部省略され短縮されている。

第4楽章　フィナーレ：ほどよい動きをもって　第1楽章冒頭を想起させる下行音型がホルンとクラリネットに現れ、狩りのテーマなどを加えつつクレッシェンドし、主題を全楽器で劇的に総奏、さらに第1楽章第1主題に依拠しつつ歓喜を爆発させる。コーストヴェット版ではここでシンバルが響き渡る。

この後、短い主題を組み込みながら様々な技法を駆使して展開していく。コーストヴェット版では再現部の主題の総奏がカットされており、第3楽章も含めこの版は“後ろが軽い”のが特徴といえるだろう。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル）、弦五部

9.28［金］

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

ペンデレツキ

広島の犠牲者に捧げる哀歌

作曲：1959〜1960年／初演：1961年9月22日、ワルシャワ／演奏時間：約9分

第2次世界大戦後のポーランド音楽界を牽引（けんいん）してきたクシシュトフ・ペンデレツキ（1933〜）は、作曲家、指揮者として広く活躍するが、その名前が世界的に知られるようになったのは、52の弦楽器のために書かれた〈広島の犠牲者に捧げる哀歌〉によってであった。弦楽器の多様な特殊奏法、微分音の集積から成るトーン・クラスター（音群）、波線や黒塗りで記されたグラフィックな楽譜、そして何よりもこの衝撃的なタイトルが大きな注目を集めた。

1958年にクラクフの音楽院を卒業したペンデレツキは、翌年、ポーランドの青年作曲家コンクールに三つの作品で応募して、すべてが入賞するという快挙を成し遂げた。奨学金を得た彼は、12月から2か月イタリアに滞在し、〈哀歌〉の作曲を開始する。当初は、その演奏時間から〈8分37秒〉というタイトルだったが、その後、若干の改訂を加えて短縮されたため、〈52の弦楽器のための哀歌−8分26秒〉と改められ、フィテルベルク作曲コンクールに提出して第3位に入賞した。さらに、1961年にパリで行われた国際作曲家会議に出品することになり、その際に「広島の〜」という言葉が付され、最高賞のユネスコ賞を受賞した。

全体は、大きく三つの部分から成る。第1部は、各パートの最高音が次々と現れ、ゆっくりとしたヴィブラートが楽器間の微妙な音のずれを作り出す。弦楽器の特殊奏法による打楽器的な響きを経て、上行と下行、拡大と収束を繰り返すトーン・クラスターが現れる。第2部は、ウェーベルンのような点描音楽。拡散して聴こえるが、厳密な模倣の手法で書かれている。第3部は、再びトーン・クラスターが中心となり、最後は巨大なクラスターが最強音から再弱音へとゆっくり減衰していく。

楽器編成／弦楽器

シマノフスキ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 作品35

作曲：1915〜16年／初演：1922年11月1日、ワルシャワ／演奏時間：約26分

ポーランドのカロル・シマノフスキ（1882〜1937）は、ショパンやヴィエニャフスキらのロマン派と、20世紀のルトスワフスキやペンデレツキらをつなぐ世代の作曲家である。ウクライナの貴族の家系に生まれ、両親からピアノの手ほどきを受け、ワルシャワ音楽院で作曲を学んだ。時代は世紀転換期。ポーランドでは民族意識が高まり、政治的・社会的動向を反映して芸術の分野でも若い世代がその意識を表明した。音楽においても「若いポーランド」というグループが、1905年にシマノフスキやフィテルベルクらによって結成された。保守的な楽壇と距離を置き、同世代の詩人や小説家、画家らと積極的に関わり、進むべき道を模索した。グループとしての活動は長くは続かなかったものの、彼らは後のポーランドの創作や演奏に少なからず影響を与えた。

シマノフスキは、オペラや4曲の交響曲をはじめ、ヴァイオリンやピアノのための作品も数多く書いた。これらは、同世代のポーランド出身のヴァイオリニスト、コハンスキやピアニスト、ルービンシュタインによって演奏され、広く知られるようになった。

ヴァイオリン協奏曲第1番は、コハンスキのために書かれ、1917年にサンクトペテルブルクでの初演が予定されていたが、ロシア革命の混乱で延期となり、1922年にオズィミニスキによって初演された。2台のハープ、ピアノ、チェレスタを含む3管編成の管弦楽で、音楽は濃厚な官能性とオリエンタリズムが息づく。当時の彼は、異国的で神秘的なスクリャービンの音楽に憧れ、ドビュッシーからも影響を受けていた。その一方で、ポーランドの哲学者で詩人のミツィンスキの「五月の夜」という愛にあふれる詩にも魅せられていた。

単一楽章の協奏曲は、大きく三つに分けることができる。第1部は、軽やかに音が弾ける管弦楽に続いて、高音域でヴァイオリン独奏が東洋風の旋律を奏でる。しばらくすると細やかに動く旋律や哀愁に満ちた旋律が現れ、管弦楽と対話する。ゆるやかな第2部は、独奏ヴァイオリンが朗々と歌い上げる。長大な第3部は、舞曲風の主題が旋回し、コハンスキ作のカデンツァを経て壮大に広がったのち、静かに終結する。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、グロッケンシュピール、小太鼓、シンバル、大太鼓、タンブリン）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ハース

静 物

作曲：2003年／初演：2003年10月19日、ドナウエッシンゲン／演奏時間：約26分

ゲオルク・フリードリヒ・ハース（1953〜）は、現代のオーストリアを代表する作曲家のひとりである。生地グラーツの音楽大学でピアノと作曲を学び、1981年から2年間、ウィーン音楽大学大学院でツェルハ（ベルクの未完のオペラ〈ルル〉を補筆完成させた作曲家）に師事した。ダルムシュタット夏季現代音楽講習会に参加するほか、フランスのIRCAM（フランス国立音響研究所）でコンピュータ音楽を学び、1999年にザルツブルク音楽祭で新世代の作曲家として紹介され、注目を浴びた。以後、ドナウエッシンゲン音楽祭やヴィッテン現代音楽祭、ウィーン・モデルンなど数々の国際現代音楽祭で作品が取り上げられ、2007年にオーストリア国家賞を受賞。2013年からアメリカに拠点を移し、ニューヨークのコロンビア大学で教鞭を執っている。

ハースは、創作の初期から平均律の響きに限界を感じ、弦楽器の微分音や四分音調律されたピアノで倍音をコントロールする手法や、倍音の解析・合成などの手法を用いるスペクトル楽派の音楽に近づき、独特の幻想的な響きを作り出すようになった。2000年に作曲された24の楽器のための〈イン・ヴェイン〉は、平均律の響きから始まるが、やがて微分音で覆われ、平均律とは対極の音響が現れる。エッシャーのだまし絵の螺旋階段のような効果をもつ、この幻惑的な作品は、カンブルランの指揮で初演されて大きな成功を収め、彼に献呈された。

〈静物〉も、2003年にドナウエッシンゲン音楽祭において、バーデンバーデン＆フライブルクSWR交響楽団と首席指揮者だったカンブルランの指揮で初演された。ハースによれば、全体は三つの部分から成る。**第1部**：弦楽器を背景に、管楽器のホモフォニックで旋律的な素材が高音で反復され、音高は次第に低くなる。ティンパニの連打に続いて第2部のリズム素材が現れる。**第2部**：すべての楽器が16分音符のリズムを刻み、グリッド状のリズムが作られる。波打つように進み、音価や響きが漸次的に変化する。**第3部**：長い音価の自然倍音列による異なる二つの和音は重なり合い、響きのずれを生み、独特のうねりを作り出す。

楽器編成／フルート3（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット、エスクラリネット、コントラバスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ソプラノサクソフォン2（バリトンサクソフォン持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、ゴング、クロテイル、ウッドブロック、銅鑼）、ハープ、ピアノ、アコーディオン、弦五部

ラヴェル

ラ・ヴァルス

作曲：1919～20年／初演：1920年12月12日、パリ／演奏時間：約12分

20世紀初頭のフランス音楽の黄金時代を開花させた作曲家モーリス・ラヴェル（1875～1937）は、ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフから新作バレエのための音楽を委嘱され、〈ラ・ヴァルス〉を書いた。しかし、ディアギレフの前で2台ピアノで試演すると、傑作だけれどもバレエではない、と受け取りを拒否され（これ以来、二人は不仲になった）、振付師のマシーンとも意見が合わず、1920年にパリで管弦楽曲として初演された。

「オーケストラのための舞踏詩」と副題の付いた〈ラ・ヴァルス〉（フランス語でワルツの意味）は、ラヴェルが1906年以来構想をあたためていた交響詩〈ウィーン〉にもとづくもので、彼自身はこの作品について「ウィンナ・ワルツの一種の賛歌として構想した。私の心のなかではそれに、幻想的で破滅的な旋回の印象が結びついている」と語っている。当時のラヴェルは、志願兵として前線に赴いた第1次大戦後の喪失感に加え、最愛の母親を亡くして心身ともに衰弱していた。こうした孤独や苦悩を乗り越えて完成させたこの作品で、戦争によって失われてしまった古き良き時代への郷愁をウィンナ・ワルツの陶酔で再現しようとした。

楽譜の扉には次のように記されている。「うずまく雲の切れ間から、ワルツを踊るカップルの姿が浮かびあがる。雲は少しずつ晴れてくる。スコア番号Aでは、踊る人々であふれかえる広間がはっきりみえる。スコア番号Bの*ff*では、天井からふりそそぐシャンデリアの光が燦然（さんぜん）と輝く。1855年頃の皇帝の宮廷」。それは、J. シュトラウスⅡ世が活躍し、ウィンナ・ワルツの音楽にのせて、全員が同じ方向に向かって旋回していた時代である。ラヴェルの音楽には、同じように回っても、何も生み出すことができないとする虚無感や絶望感がうず巻いている。

コントラバスから始まる低音楽器の不気味な導入部に続いて、次第にワルツが姿を現す。ラヴェルの斬新な音色感覚で音楽はきらびやかに輝く。歯切れの良いリズムと優美なワルツは交替しながら大きく盛り上がるものの、ワルツの崩壊を暗示するかのように最後の2小節ですべては断ち切られる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、銅鑼、グロッケンシュピール、クロテイル、カスタネット）、ハープ2、弦五部